

# 敢えて,わざと,意図的に 2 体験版

~積極お漏らし短編集~



お母さまは、つとお立ちになって、あずまやの傍の萩のしげみの奥へおはいりになり、それから、萩の白い花のあいだから、もつとあざやかに白いお顔をお出しになって、少し笑って、

「かず子や、お母さまがいま何をなさっているか、あててごらん」  
とおっしゃった。

「お花を折っていらつしゃる」

と申し上げたら、小さい声を挙げてお笑いになり、

「おしっこよ」

とおっしゃった。

ちっともしやがんでいらつしゃらないのには驚いたが、けれども、私などにはとても真似られない、しんから可愛らしい感じがあつた。

◆ 体 験 版 目 次 ◆

・ 姑さんが障子戸に溜まった埃を確かめるように	4
・ 背後から近づいてくる気配を読む事	6
・ 美優と佳奈のおむつ&おしっこデート	9
・ デイックガール×カントボーイ	12
・ 性癖コーディネーター	19
・ 僕の性癖をなす一ピース	22
・ 悪い事をするのが好き過ぎて	26

# 姑さんが障子戸に溜まった埃を確かめるように

私、楽々花は、もう膀胱と煩惱に支配されきっていた。膀胱がおしっこをしたいと言いつつ、私はその尿意を解放する場所まで急ぐ。私の膀胱はせつかちだから、すぐに出口からおしっこを溢れ出させようとしてくる。

「マキ、早く早く〜！ こっちこっち」

私は親友の真希奈を短縮呼びして、最近のお気に入りの場所まで彼女を先導する。

「もうララったら、そんなに腕引つ張らないで！」

『ららか』なんて呼ばれるのは、毛が逆立ってしまうくらいに反射的な嫌悪感が出てしまうから、出会ってすぐの自己紹介の時に、呼び方を私の方から指定させてもらった。『ララ』は、もう呼ばれ慣れていて、違和感はまったくない。それは、私の中では完全に自分を識別するための名称だという事が決まっていた。



——私と真希奈は、公園のトイレまで辿り着いた。

「はあ、はあ、ふう……」

「ララったら大丈夫？ 完全に息上がっちゃってるけど」

「あまり……大丈夫じゃ、ない……」

「もう限界っぽいね？ 早くしないと出ちゃうんじゃない？」

「んんっ、やばあ……も、漏れそう……」

ここまで急いで駆けてきたから酸欠で、しかも、脳内がおしっこしたいで満たされている状況だったから、喘ぎにも似た声が出てしまった。

「手を引かれるままついてきたけど……ここ、男子トイレじゃない！ というか——」真希奈は私の様子に気付いたように、話を継ぎ足した。「ララ、顔真っ赤だよ？ 大丈夫？ 太腿がブルブルと震える感じだし……実は、もうおしっこちびり始めちゃってるでしょ。違う？」

「あ、あはは……バレてたか。ほんととはね？ このトイレの中に入った瞬間から、おしっここのきつい匂いを嗅いじゃって、もう身体が制御できそうになくなって……。ほらここ」

私はそう言っつて、小便器のへりについた黄ばみを、人差し指と中指をそろえて拭った。潔癖な姑さんが、お嫁さんの目の前で、障子戸の枠の埃を指で掬って確かめるように。

『あら。こんなに埃が溜まってるじゃない。普段から言っていますけどね、楽々花さん。こういう所に隙を見せる事に、一番しつくりくる言葉があるから教えておくわね。画竜点睛を欠く、よ。他の部分がいくら完璧でも、障子の棧に埃が残っているのは、台無しという事』

私は脳内で『埃』を『尿石』に言い換えた。どんなに綺麗に見える、清潔な感じのトイレでも、尿石が取り切れていなくて、ツーンとしたおしっこ匂いが取れない所がある。逆に、そこに趣がある。そして、埃の代わりに黄ばみの粘り気の付いた指を、自分の鼻にもっていく。

「あは、これ……。すごく凝縮されたおしっこ匂いしそう……。嗅いでもいい？」

真希奈の言葉も待ちきれず、私は二本の揃えた指を、鼻に近づけていった。

「うへえ……。きもいきもいきもい！　ララったらこういうのが癖なの？」

口調は呆れている風を装っている感じだけど、好奇心交じりのものだというのが伝わってくる。真希奈はいつも刺激を求めている。知らないものを知りたい、そう思っている子だ。

「すう〜、う、うおっ、すっごい匂い……」

「うーわ、ガチでやばそう。ララが拭う前に、黄色いのがベっとり付いてるのは、はつきり分かったもんね」

「あ、待って、ああ出るっ！　おしっこ出ちゃう！」

私はおしっこ匂いを嗅ぐと、栓が抜け落ちてしまったかのように、尿意が我慢できなくなってしまう。この時も、その例に違わず、漏らし始めようとしていた。

——続きは製品版でお楽しみください！

## 背後から近づいてくる気配を読む事

我が家には真剣がある。座敷の床の間に鎮座している。祖父が宝にしている骨董品だ。

木刀や、なまぐらの模造刀などではない。まごうこと無き本物なのだ。

銃刀法に違反するって？ バカな私に聞かないで欲しい。なんでも美術品として登録証のあるものは、所持していてもいいらしいけど、そんな物は見た事がない。

にわかには信じられないかも知れないけど、とにかく、確かに、真剣があるのだ。

ひと昔前の夏、西瓜割りの時に祖父が鞘から抜き払ったのは底冷えのするような、凄みを持った刀。知る人が見たら、驚くような銘が入っているような刀だった。

スイカ割りは、目隠しをするのが普通だ。目隠しをし、最初にその場でぐるぐる回ってから、スイカの場所を当てて歩いて行く。ところが祖父は、そんなルールなどお構いなしだった。スイカのある所までつかつかと歩いていくと、一閃！ まさに一刀両断にしてしまった。

木の棒でたたき割ったボコボコのスイカとは違い、すっぱりと切

られたスイカは美味しかった。

合気道の達人でもあった祖父の血を受け継いでいるのか、私には気配を読む事ができる。祖父が開いていた道場で、幼い頃から師事していたことも、そういう能力の目覚めに、力を貸してくれたのかも。

人が背後から近づいてくると、生ぬるい空気の流れを感じる。目で見ている訳でもないのに、背後の人が、どこを注視しているのまで分かってしまう。

身体が成長するに従って、顔だけではなく、お尻や胸を注視される視線が増えていった。まったく、人が見てないと思ったら遠慮がないつたらありやしない。そんなレーザービームみたい見られたら、スカートに穴が開いてしまいそうだ。

◇ ◇ ◇

私が中学二年生だった頃、ストーカーに付き纏われる時期があった。自宅を特定されてからは、毎日のように、後を付け回された。

当時の私は、授業中、トイレを我慢しがちな子だった。授業を受け、そのままホームルームで先生の話を聞き、放課となった時にはかなり限界だった。電車の接続が悪かったので、狙っている車両を逃したら次までかなり待たされてしまう事もあり、途中にトイレで用を足すという考えはなかった。私は、とにかく早く帰宅したかった。だからストーキングを受けている間は、常におしっこを我慢し

ている状態だった。おしっこがしたくて、途中でトイレに寄ったという履歴を、相手の頭に記憶させてしまうのも、恥ずかしくて嫌だった。

ストーカーを途中でまこうと思って道を変えた時も、交差点を曲がってすぐにダッシュした時も、視線を感じ続けた。もう、本当にしつこい。なんだっけ、探偵事務所の人間が、決定的瞬間を捉えるために尾行しているようなしつこさがあったというか。

尿意は本当にやばかったし、焦りは募る一方だった。変に帰り道を変えてしまった事で、家までの帰り道が長くなってしまったのもよくなかった。

最初は早歩きで逃げていたんだけど、おしっこがしたすぎて、素早い動きが封じられていった。私は徐々に、のろろとした足取りになりつつあった。

あつ、やば……。

股間に温かな湿り気を感じた。その瞬間、私は反射的にその場にしゃがみ込んでしまった。

こういう時に、しゃがみ込むという行為は、全てを諦めてしまうという意味と同義。しばらくは抗い難い出口への圧と、勝ち目の薄い戦いを続けていたけれど、勝敗を決める天秤は、確実に敗北へと傾きつつあった。

最初は股間に若干の湿り気と温もりを感じる程度だったものが、たちまちのうちに様相が変化していった。

じゅいじゅいと、下着を隔てていても聞こえてくる音。

だめ、本当に漏れちゃう。出口がひくひくと動き、締め付ける力が失われていく。温かい流れが止まらず、下着から垂れ始めてしまう。

「あつ……ああ……」

一段と強い波に襲われた時、私にはもう、抗う力は残されていなかった。身体全体が震えるくらいに、出口に力を入れているつもりなのに、流れ出るおしっこはほんの少しの時間、止まるだけ。私はそのうち、無駄な抵抗だと悟らされ、脱力してしまった。

溜まりに溜まっていたおしっこが、一筋の流れを作って、スカートから地面へと流れおち、その水たまりはどんどん面積を広げていった。その時感じ続けていた視線は、私の作るおしっこの滝、その一点を凝視していた。

とまれ、とまれと念じても無理で、おしっこは止まらない。念じても、出口は開いたままで、自分の意志ではどうしようもないのだから。

身体が抵抗をやめ、心が折れた後は、抱え続けた欲求を開放する気持ち良さしか残らなかった。自分を見ている視線すらも頭から抜け落ち、しばらくの時間は、出口を震わせ放出されるおしっこの感覚だけが、私の脳みそが受け取る情報だった。

おしっこを出し終え、しばらくの放心状態から返った時、視線の距離が、さっきまでよりもずっと近くから来ている事に気がついた。

私は、ストーカーの彼を見た。彼は、ズボンのチャックを下ろしていた。そして、へそに当たるくらいに反り返っているものが、そ

こちら飛び出しているのが目に入った。さっきまで、消え入りたくらいに恥ずかしい気持ちだったのに、お漏らしを境に、私の心境に変化が現れていた。

私は初めてみる男性の凶器、それも天に向かって屹立しているものから目が離せなかった。

——続きは製品版でお楽しみください！



## 美優と佳奈のおむつ&おしっこデート

「私は禁酒をしようと思っている」

こんな書き出しで始まる小説があった気がする。確か、太宰治の作だったはず。

わたしはそう思って本棚を探すと、短編集の中に『禁酒の心』というタイトルの作品を見つけた。この掌編の中で太宰は、お酒の事を、これでもかというくらいにこき下ろし、お酒を嗜む人を「吝嗇卑小」と言い切っている。短い作品だし、言っている事がいちいち面白いので、触れる機会があつて良かったと親には感謝している。元々は親の蔵書の中にあつた本で、悪い言葉で言うと、借りパクしてしまったものだ。

わたしもまた、思春期の少女に多く見られる、文学をこよなく愛する女子高生だ。授業の合間には、人を寄せ付けにくい雰囲気を出し、文庫本に熱中している時間が多かったし、まだ見ぬ本を求めて、足繁く図書室に足を運んでいた。

お酒の話題に戻すと――

わたしは酔いやすく、寝る前のトイレを忘れてしまう時があり、朝起きると大きな地図を描いている事が、十七歳になった今でもある。これはさすがに恥ずかしい。友人宅で飲んだ時、皆で雑魚寝を

したのだけど、その時にもやらかしてしまった。その時のおしっこの匂いが取れず、絨毯をダメにしまったようで、再び友人宅を訪れた時には交換されてしまって、違う柄のカーペットが敷かれていた。

わたしは未だ十七歳。

成人前に飲酒をするといった行為は如何なものかという話もあるけれど、それはそれ、これはこれとして、自分の体質的な問題を、カバー出来ずに招いた結果に対しては、しっかりと反省しなければいけないと思う。

実を言うと、私は普段、おむつを着用している。体質的におしっこを我慢する事が苦手だ。おむつなしではまともな生活が送れないのだから、そのあたりの自己管理だけは最低限でなければ。

泥酔して駅のホームで漏らした事もある。下着もスカートもぐしょ濡れにしてしまったが、家に帰らない訳にもいかず、恥を忍んで終電に乗った。その時は、何か怪しい人間を見るような視線をいくつも感じた。濡れた衣服を着ていたという事もあつたし、尿特有の異様な匂いもあったのだろう。お酒を飲んだ時の尿は、特徴的な匂いを発するから、周囲の客にはバレバレだった事だろう。

運が悪ければ、警官に声を掛けられ、職務質問からの年齢確認という、最悪な流れも考えられた。だから、外で飲むのは金輪際辞めようとして誓った。元々実年齢よりも若く見られるのだ。外で飲むのは自殺行為と言うに等しい。

酔うと気が大きくなるため、失禁してしまったその時は、そんな

に凹んだりほしないのだが、翌朝、頭痛と共に目覚めると、アンモニアの匂いが鼻につき、昨日の醜態を思いやって自分が嫌になるのだった。

「美優、お前も一杯やってみるか？」

父に軽い調子で勧められ、口にしたのが最初だったつけ。

「あなた、何言ってるの!? 冗談でも言っちゃだめな事つてあるんだから!!」

躍起になって阻止しようとする生真面目なお母さん。

「わたしも未成年と言ってももうこの歳だよ？ ちよつと舐めてみるくらいだよ。それ位ならいいんじゃない？」

頬がかつかと火照る感じ、心にもたらされる高揚感、どこか鈍くなったような脳みその感覚。これが『酔い』なんだと初めて知った経験になった。

それからというもの、わたしを巡るお酒にまつわる事には、ろくなエピソードがない。

だから。

わたしは禁酒をしようと思っている。

まさか、ツインテ女兒服でランドセルを背負った自撮りをSNSに上げている女の子が、酒を飲んで酔っ払っているなんて、そんなこと想像できないだろうし、キャラ崩壊も甚だしい。興味本位で始めたSNSだったけれど、気付いた時には万を数えるフォロワーがついてくれるようになった。自分を好いてくれる人達を裏切るような真似は、これ以上できない。

女兒ファッションとアルコール、どちらを取るかと訊かれたら、女兒ファッションを取る。可愛いのは正義だから。アルコールは可愛い。あざと可愛い感じは出るのかも知れないけど、私はまだ、そんな風な魅力を持った女の子にはなれないと思う。

先にも言ったように、わたしはおむつがないと生活できない、読書好きでちよつと内気な女の子だと思う。

内気と言っても、人とコミュニケーションが取れない程ではなく、それなりに話題にも付いていく事はできる。ただし、人と喋った後にはどつと疲れが出て、眠りこけてしまう事も多い。

ハイリー・センシティブ・パーソン。略してHSPの気があるかもしれないと医師に言われたことがある。視覚や聴覚などの感覚が過敏で、それによってストレスを感じやすい体質の可能性があるという事だ。

◆ ◆ ◆

学校がお休みの週末。わたしは珍しく街に出ていた。

白いブラウスに、ミディ丈のチュールスカートを合わせたが、生地透け感が、おむつまで見えてしまうんじゃないかという錯覚があった。絶対に見えないのに、もし、万が一透けていたらと考えると、なぜか気分が高まった。

もし自分で、透けてしまうスカートに改造したら、他人にはどう映るのだろうか。透ける訳のないスカートだから、気にも留められ

ないかもしれない。でも透けているのは事実だから、自己満足かもしれないが、露出的な快感をもたらしてくれる可能性もあると思った。

露出的な快感。

着衣のまま、出口を緩めるのが趣味の佳奈さん。

限界まで尿意を我慢し、ギリギリまで耐えきった尿を放出するの  
がやめられない亜紀さん。

そして、わたし

SNSで知り合った三人がカラオケボックスで開かれたオフ会に参加し、盛り上がった日が記憶に新しい。

その話題の中で、佳奈さんは言っていた。「私は着衣のまま放尿する行為は、露出的な快感をもたらすと考えている。その快感は、人知れずおしっこをおむつに出す、みゆちゃんも感じている事なんじゃないかな」と。

おむつを着けている時は、少しでも尿意があつたらすぐに出すようにしていた。溜めて出すと、吸収し切れないおしっこが、ギャザーを乗り越えて漏れ出してしまう可能性があつたから。今日はなるべく我慢していようかな。体質的に、とても難しいのだけど、なるべく……出さないように……。

お洋服屋さんを冷やかしたり、雑貨屋さんでピアスを見たり、店員さんに似合うって話しかけられ、話題があちこちいく中で、「そろそろ、かな」っておしっこをちーしちゃう。

普段なら意識せずに行っていた排泄を、ある程度制御すること、

人が前にいるのにおしっこをしている自分にドキドキした。少しでも溜まると出したくて仕方が無くなるのだけど、粘れるだけ粘ってみる。

もう無理だと思う場所が、人が少ない所などではなく、買いたいものを見ている時や、エスカレーターで階を移動している最中という、ランダム要素があるのが、私の心拍数を上げた。エレベーターの中などでは、おしっこをしている音が聞こえてしまうんじゃないかという、ハラハラとした気持ちが生まれた。垂れ流しでは得られなかった、背徳心のようなものが、私に目覚めた瞬間だった。排泄欲を排泄欲とも思わず、単に排出していたわたしとは違うんだ。

——続きは製品版でお楽しみください！

## ディックガール×カントボーイ

一

不眠症の街。眠りたくても眠らせて貰えない、ぎらぎらとした街。そこには、不夜城という言葉がふさわしい、昼夜を問わない喧噪があった。

この街を待ち合わせに選んだ男が、駅前広場で所在なさげに佇み、スマホに目を落としている。

相手はいつまで経っても現れない。どうやら、約束をすっぱかされた形のようにだ。

その男、翔太は、暇つぶしにスマホを弄るのをやめ、ぼんやりと人間観察を始めた。

歓楽街の最寄り駅は、終日人混みでごった返していた。様々なファッション、様々な髪型、歩き方。そして様々な人種。万華鏡をくると回すように、一時として同じ光景は繰り返されない。よって飽きがこない。反故にされたとおぼしき約束も、不思議と引きずるようなことはなさそうだ。この街では無数に繰り返される出会いとすっぱかし。ちよつと運が悪かったただけだ。

そう思って、翔太が踵を返しかけた時――

「もしかして、なんですけど」

翔太が声のした方向を向くと、背が高く、中性的な女性が立っていた。凛々しい顔立ちにウルフカットにした髪がよく似合う、美形と言って良い人だった。白百合のような頬に、薄く紅を差している。

「あつ、はい……」

翔太は、ちよつと気後れた感じで返事をする事しかできなかった。

「待ちぼうけ、とかです？」

「……そうですね」

「私もそうなんです。気合い入れて盛ってきたつもりなのに嫌になっちゃう」

女性は軽く溜息をついた。伏し目になった時も、また絵になる。

「初対面だったんですか？」

「そうです。相手がちよつと病んでそうだったし、気まぐれ起こしただけだったのかも。あなたは？」

「ツーショットチャットで知り合ってアボを取ったまでは良かったんですけど――」

「ふんふん、それでドタキャン食らったっぽい、と」

女性は、翔太が話し終わる前に、深く頷きつつ結論づけた。もう、先の話は端折ってもよさそうだと翔太は思った。

翔太が人に聞いた話では、ツーショットチャットは古くからあるチャットサービスではあるものの、そこそこの成功率で相手が見つ

かるといふ事だった。

「まあ、よくある話ですよ。そんなに痛いダメージは入ってないつもりです」

「そうですか？ 私は楽しみにしていた週末返せ、という気分ですよ」

「……確かに虚しさはありますが」

「だってヤリモクだったんでしょ？ 欲求不満なんでしょ？」

「まあ、そうなんですけどね。……しかし、ずいぶんずかずかと聞いてくるんですね」

翔大は心の中で、「嫌な気が起きないのは不思議ですけど」と付け加えた。

「私もヤリモクだったから、もう居ても立ってもいられない気分ですよ」

「ということは、僕に声をかけたのって、逆ナンなんですか？」

「ううん、そんなことはないです。いや、どうなんだろう、そうなのかな？」

「僕なんかを選ばなくても、それこそ引く手あまたでしょうに。立っているだけで声かかると思いますよ」

先ほどから、ちらちらと視線が来ていることに、翔大は気付いていた。そのほとんどが、彼女に焦点を合わせている事も。

「同性に誘われたらすぐに付いて行きますけどね。打てば響くような話には、現実ではまず出会えない」

「その辺、男女差があるのかもですね」

男性が同性との出会いを求める場合は、出会いを待つ人がいる場所が噂に上る。それにメッセージのやり取りでも、話が決まるのは簡単なイメージが、翔大にはあった。

「気分変えていきませんか？」

「と言うと……？」

女性がいきなり変化球を投げてきて、翔大は彼女の意図を汲めなかった。

「飲みませんか？」

彼女の言葉にはスピード感があった。どんどん距離を詰めようと試みて、ダメなら「はい、次」のような、率直さ。

さらりとした言い方がごく自然で、断ろうという気持ちを起こさせない。

これは手練れだな、と翔大は思った。誘いを断って、果たしてこの後何をするかと言われても、帰宅して寝るだけだ。

会う予定だった子とは性行為をする事が目的と言っていた彼女。翔大も元々同じ目的ではあったが、目の前の女性は高嶺の花で、手を出そうという気分には到底なれなかった。

——ただ、一期一会の気持ち。

何かに期待する訳ではないが、何かが起こる可能性はゼロではないと、翔大は自らを奮い立たせた。ただその何かの具体的な形は、翔大には想像もつかなかったが。

「お願いします。僕なんかでよければ」

翔大は遠慮がちに、女性の提案を受け入れた。

「何謙遜してるんですか。細マッチョって感じがいいなって。それに雰囲気好きです。なんでドタキャンなんだろう、勿体ないなって思ってますよ」

中性的な彼女の中でも女性的な部分、ちょっと厚ぼったい下唇が、艶然としたカーブを描いた。魅力のある微笑みだった。

額面通りに受け取ってもいいのかと考えるのは翔大の悪い癖なのかも知れない。嬉しさを感じたのは確かだったけれども。

翔大は少し照れていた。そして返す言葉を選んでいる時、彼女が再び口を開いた。

「あの」

「はい」

「なんてお呼びすればいいですか？」

「翔大と言います」

「私は沙莉菜さりなです。以後よろしくお願いします」

「こちらこそ、お願いします」

「予約してあったバーがあるので、そちらでお話ませんか？ キャンセル入れるのも悪いかなって」

「いいですね、お任せします」

沙莉菜の話の持つて行き方に玄人っぽさを感じた翔大は、流れに従うのが得策だという勘に従う事にした。

翔大は沙莉菜に連れられて、彼女がよく飲んでいるという店に来ていた。客の入りは上々のようで、がやがやとした話し声があちこちから聞こえてきた。沙莉菜の取った予約席は奥まった場所にあり、店内でも比較的静かだった。

「しつぱりと語り合う、という感じではないですけど」

「これくらい賑やかさがあつたほうが、僕は居心地がいいです」  
「そう思ってくれると嬉しいです」

二人はしばらく当たり障りのない話をしながら、アルコールで舌を湿らせていった。口が滑らかに回るようになるにつれ、少しずつ踏み込んだ話をするようになった。翔大が感じていた気後れのようなものも、酒が溶かし去ってしまったようだ。

「僕がバイだと言ったら相手がなんとなくトーンダウンしちゃって。悪い予感してたんです」

翔大はそう明かすと、ハイボールを呷った。

「バイなんです？」

「ええ。自分では、ゲイ寄りのバイなのかなと思っています」

「奇遇ですね、私もバイなんですよ。会おうとしてたのも女の子でしたしね」

「僕も同性と会う予定だったんです。なんだか不思議な気分です、お互いあべこべな展開になっているようで」

同性と出会うつもりで街に出て来た二人が二人、何の因果か、出

会ったばかりの異性と酒を酌み交わしている。巡り合わせとは面白いものだ。

「翔大さんってかわいいですよね」

「それって褒め言葉と取っていいんでしょうか」

「気を悪くさせたら申しわけないけど、背が私より低いっていうのもあるし、かわいい。ちよつと、女の子の恰好も見てみたくなる」

「百六十四センチなんですよ」

「そっか、私と五センチ差になるね。それにヒールの分が上乗せされる」

沙莉菜はハイヒールを履いていたため、翔大との背の差は、十センチ以上はあった。

「身長差カップルって言いますけど、どのくらいの差から、なんでしょね」

口を滑らせてから、翔大ははっとして胸に手をやった。滲んできた汗を服に吸い取らせる。高嶺の花と思っていたのだから、ちよつとフランクに話しかけられているからといって、勘違いしてはいけない。付き合うという話は一言も出ていないのに、気があるような素振りに見られてしまう。

「カップルかあ。ふふ、翔大さん」

「はい」

「今のままでもかっこいいかなって思うけど、女の子になった方が実は化けたりしてね」

翔大はカントボーイだ。外見と、秘められた部分を一致させた経

験はもっている。いわば女装だ。姿見で自分を見た時、倒錯的だとも思ったし、性の統一による安心感も覚えた。まだ新しい記憶として心に残っている。

その時、隣のボックス席でばたばたと音がし、客が立ち上がる気配があった。どうやら空席になるらしい。

彼女の誘いに乗ってみようか。話すなら今だ。翔大はひと呼吸置いてから、沙莉菜の耳元に口を近づけた。

「実は――」

「私――」

二人の囁き声が重なった。

「どうぞ？」

翔大は先を譲った。

沙莉菜の唇が、ちよつと薄くなり、元に戻る。唾を飲み込んだようにも見えた。

「あの、ちよつと言いつらいんですけどいいですか」

心もち、改まった調子の沙莉菜。

「なんででしょう」

「私、実はついてるんです。いわゆるディックガール、ふたなりではないの」

「ついてる？」

「ほら、ここ」

沙莉菜はそう言っ指で指し示すと、向かいから翔大の隣へと席を移し、手を取って、下腹部へと導いた。

そこには、女性にはないものが確かに存在していた。

「そう、おちんちんが付いてるの」

翔大が手を置いている間にも、その膨らみは、はつきりとした形を取りつつあった。沙莉菜の言う通り、ペニスがそこにあるのだから。

「……変に刺激しないでくださいね。ただでさえむらむらしているんだから」

「あつ、すみません」

動揺から手をどける事も忘れていた翔大は、沙莉菜に謝った。太腿に手を戻した時に、男性器の触感がまだ残っていた。

身体が反応した気がする。性器が本能に従い、少し潤ったかも知れない。

「性欲の処理もなかなか面倒なんです。嫌いじゃない、むしろ好きで、完全に習慣になっていきますけどね。それでも女なので、男性が私と同じなのか分かりませんが」

翔大にも分からなかった。体感のできないものだったからだ。カントボーイには答えられない。

「僕も分からないんです」

「そうなんですか？」

「僕にはついていないんです」

「……え？」

翔大は女性器が——と答えようとしたが、思い直した。沙莉菜の言い方に合わせようと考えたから、

「おまんこが付いてるんです」

と、あからさまな表現に変えた。翔大は話しながら、言葉尻が上ずるのを感じた。

「ええ……?!」

「いわゆるカントボーイなんです」

「そうなんだ。どこか女の子っぽい雰囲気ある気がしてたけど、それが正体なんだね」

女性の勘のようなものなのだろうか。沙莉菜は妙に納得しているように、翔大には見えた。

「ですから、性自認は男性なんです。性欲は女性的なのかもしれません」

「そっかー。お互いがお互い、本来の性について分からない。面白いね」

「我慢できない時もあるし、全く感じない時もある」

「へえ、そんなものなんだね！」

「そう」

「じゃあ、翔大さんって受けなの？」

「受けるしかない気がする。お尻かおまんこか、二つの選択肢はあるけど」

レズビアンには攻めと受けの役割分担があるが、翔大には、女性を相手にした経験がなかった。男性は皆、後ろの穴に挿入してきたので、前にペニスを入れられた経験はなかった。

「なるほどね……」沙莉菜は悪い口調を使うと、チロリと舌なめ



ずりをした。「私は攻めが妥当だよねえ」

沙莉菜は、翔大をじつと見つめて逸らさない。先に視線を外したのは、翔大の方からだった。

それから少し、無言の時間が過ぎた。翔大は間が持てなくなつて、酒に口を付けた。それに合わせるように、喉を潤す沙莉菜。

翔大は、無意識にズボンのポケットの中を確かめていた。そして思い出す。煙草はとうの昔に辞めていたのだった。

手持ち無沙汰になつた翔大は、飲むペースが上がる。沙莉菜もまた、カクテルグラスに手を伸ばす回数が増えてきた。

「まだ飲むでしょ？」

「付き合います」

ウェイターにそれぞれのオーダーを告げると、また二人は黙つた。

水面下での駆け引きが展開されているようで、その実、翔大にはどうすれがいいか分からなかつたのだ。隣にいる沙莉菜の表情を窺う勇氣もなかつた。

「ねえ、翔大くん……？」

沙莉菜の猫なで声で、空白は破られた。トーンが若干上がったのが翔大にもはつきり聞き取れたが、くん付けに変化した呼び方には気付かなかつた。

「なにかな」

心を落ち着けようとするが、翔大には上手くいかない。とくんとくんと、心臓の拍動が意識される一方だった。

「私も」

「……」

「私も触つてみて、いい？」

「……うん」

遠慮がちな彼女の手が、翔大の太腿に置かれた。引きずるように、ゆっくりと内またを這う指は、やがて、翔大の急所を捉えた。身体の中が、急速に火照っていく。

じわりと蜜が染みだした感覚が、翔大を包む。

沙莉菜の、女性らしい繊細な指先が、翔大の股間でゆっくり上下し、擦る。やがて、翔大の小さな突起を探り当て、とんとんとリズムカルに叩きはじめた。ズボン越しなのに、彼女の責めは的確だった。

「……っ、く……」

翔大は、その責めから逃げるように、腰を左右に振つた。びりびりとした快感が後を追ってくる。寄せては返す波、それがだんだんと高くなっていく。

「本当……ほんとくに、付いていないんだね。そして付いている」

微熱でもあるかのような、夢見る声音で、沙莉菜は翔大だけの鼓膜を震わせる。翔大は、耳までが性感帯になつたようにぞくりと背筋を伸ばした。

そのうち、忘れていた官能が翔大を捉えた。

尿意だ。

自慰行為によって性感が高まると、尿意も高まる事がある。性感が高まる事で交感神経が優位となり、膀胱の活動が活発になるのだ。

相手ありきの性行為でも、それは同じ事だった。

「んっ、さ、沙莉菜さん」

「なあに？ 翔大くん」

「トイレに、行きたくなってきちゃった」

飲むスピードが上がっていた事もあるだろう。一度意識の上に乗った尿意は、疼きとなって、下腹部の中から脳髄へと伝達される。

「実は私もなの。まだ固くしちやってるし、おしっこはしたいしで、色んな意味で切ない」

翔大は沙莉菜の股間をのぞき見ると、ズボンに染みを作っていた。性欲の発露に耐えた結果分泌された液体なのか、それとも尿意が限界に近く、ペニスの先からじわりじわりと染み出しはじめているのか……。

「まだ、まだ行かないよ」

沙莉菜は翔大の言葉に先回りして、トイレを使用する事を禁じた。欲を解放できず、翔大は苦しく思ったが、膀胱の膨らみが、女性器の奥の部分を甘く刺激している感覚もあり、その快感を甘受したいという気持ちもあった。

——続きは製品版でお楽しみください！

## 性癖コーディネーター

今回は幾分か手こずったが、私はいつも通りに仕事をこなし、空路、所属する組織の本拠地を目指していた。

ロンドンにはヒースロー空港から、母国であるアメリカのJFK国際空港まで。短いとは決して言えない時間を、私は空の人として過ごした。不思議と疲れは感じず、仕事を無事終えられたことによる高揚感があった。時折ある生理現象もリラックスして済ませる事ができ、人心地を取り戻した気分だった。

しかし、だ。

全く、うちの組織は人使いが荒すぎる。このミッションが終わったらバカンスだと、それだけを夢想していたのに。

インドネシアのバリ島もいいし、エーゲ海に浮かぶ無数の島々を眺めながら、クルーズ船でワイングラスを傾けるのもいいな。久々にイスタンブールを訪れて、キッチン付きのアパートメントを借り、一ヶ月ほど、何もかもから解放されるのも最高だ。更に贅沢を言わせてもらえらるなら、猫が住んでいる部屋がいい。猫も私も好きな方を向いて好きな事だけをする――

それだけのオフが貰えて当然といえる、今回の任務だと思っただけ。それなのに。

飛び込みの仕事が入ったからと、到着予定の空港には送迎車を待たせてあるという。至急その車に乗り、ただちに本部に出頭せよと。旅客機はすでに着陸態勢に入っており、空港到着まで間もない。一旦旅のことは頭から追い出し、自分に与えられる次の任務について考える事にした。経験上、碌な話ではないというのは分かっている。溜息の一つもつきたくなるが、それで私はご飯を食べている。仕方のないことだと半ば諦めている。

◆ ◆ ◆

「今回のターゲットの写真がこれだ」

ボスが、無用の長物という言葉を具現化したような巨大なデスク越しに、手にしていた写真を私に滑らせてきた。

……は？ 終わらせてきた任務についてのねぎらいの言葉もなしに、もう次の話？

喉から出そうになった言葉をすんでの所で飲み込み、私はデスクに手を伸ばし、それを受け取った。そして分析者の視線でそれを見る。

背筋のすつと伸びた、なで肩で細身のシルエットをした女性。上半身に比して脚が長く、事前に提示されたデータよりも高身長に見える。華美ではなく、地味な服のチョイスが、却って育ちの良さを感じさせる。サイズ感が不自然なくらいにフィットしていて、私は、女性が身に付けている物全てがオーダーメイドの可能性を考えた。

目は伏せられていたが、切れ長で、クールな雰囲気を感じ取った。人前では取り乱す事のないよう、訓練された表情だと思う。

「新庄グループというのは知っているかね？」

「はい。日本にある、世界有数のコングロマリットの一角をなしているという」

「写真の女性は、その新庄グループの現総帥、新庄章太郎しんじょうしょうたろうの一人娘だ。名を、新庄佳子よしこという」

「次の任地は日本という訳ですか」

「そういう事になる。ロンドンから今度は東京と、慌ただしい事甚だしいが、君にしか頼めなくてね。すまないとは思っている」

ボスは、言葉上は丁寧な物腰で、私に同情心を頂いているような口ぶりだったけれど、この上司のもとで何度も仕事をしてきた私は、言葉半分としても素直に受け取れなかった。

新庄佳子。新庄グループの総帥令嬢と聞いて、知らないと思える社交界の人間など皆無だろう。その立場と、結婚適齢期という事もあり、引く手あまただと言うが、浮いた話は聞かない。身持ちが固いのか、それとも他に理由があるのか。

私の名はドリー。当然本名ではなく、通り名だ。仕事に使う名は、それこそ一品同様、同じ名前を使う事はない。名刺、パスポート、運転免許証等、それぞれ全く別のものを用意する。

通り名を使うのは、私が普通ではない仕事をしているからに他ならない。

アメリカの諜報機関に所属する私は、ターゲットをハニートラッ

プに陥れ、有用な情報を引き出すスペシャリストだ。相手の条件には男女は問わない。滅多に活用する機会はないが、狙撃の腕も鍛え上げている。元々狙撃手として、この機関で活動する事を希望していたからなのだが、今の職務では、その腕もさび付いてしまいそうだ。

相手は巨大コングロマリットの総帥の一人娘だ。調査をするのも一苦労だろう。だけど、私にもこの道のスペシャリストだという矜持があった。まずはどういう人物なのか、地道な調査が必要になるだろうが、いつも通りに任務を遂行するだけだ。

先に東京に入り、事前調査をしていたという同僚の諜報員から、とある情報もたらされた。

佳子は高層マンションの一室に、夜な夜な女性を呼び寄せているという。佳子にはある特殊な性癖があり、相手の女性に尿意を我慢させ、漏らさせるというプレイを繰り返ししているという所まで突き止めたという事だ。そこまでのプライベートな情報を入手できた同僚も、大した実力者だと思う。仮に諜報員という職を辞める事になっても、タブロイド紙あたりの記者として食いっないでいけそうだと思った。誰もが驚くようなニュースをすっば抜いて、売上に貢献する事ができるのではないか。

佳子は、身上書に似た情報が記入された、性的身上書を携え、性癖相談所に入入している事も突き止めた。身上書は、別名釣書とも言い、住所、氏名、年齢、性別、学歴、資格、職歴、収入、趣味などを記した用紙に、自分の写真を貼り付けて、結婚相談所など

に提出するものだ。佳子の学歴は事実と異なる内容で、大学の学部卒となっていた。本来は大学院へと進んでおり、修士であるはずだ。婚活では男性がコンプレックスを感じないよう、学歴を偽る事も多いというが、佳子もそのあたりに配慮したのだろうか。



身上書を表の顔の履歴書と言うならば、性的身上書は裏の顔の履歴書と言えるだろう。これまでに収集した情報によれば、佳子は同性愛者らしいが、結婚相談所にも登録している事から、仮面夫婦探しをしているのかも知れなかった。これも同僚の男性エージェントが、相談所の登録者として接触を図り、彼女の身上書を入手していたのだ。佳子の身上書をコピーしたものは、几帳面さが窺えるかつちりとした楷書体で記されており、少なくとも字面からは、誠実さをアピールしうる内容を書かせた。

身上書に添付された写真は、最初にボスに見せられた時に抱いた印象と大差なく、美女と言ってもいい素質を持っていた。眼鏡を外せば地味な感じがなくなるだろうし、しっかりメイクを施せば、華やかな雰囲気を持った、魅力溢れる女性に映った事だろう。彼女は、新庄グループの血族として、閨閥結婚を迫られることもあったのだろう。本人の意思が尊重されない、家格を高める目的での婚姻。そんな下らないことで、自分のパートナーを決めるなんて、まっぴらごめんだらう。私はその一点で佳子に同情した。

婚活している佳子との接触を図るため、私も結婚相談所へ登録していた。当然、提出した身上書は嘘を並べたてていた。仮に、アメリカで生まれ育ち、アイビリーリーグ出身で……などと書いても、相手の男を鼻白ませるだけだと思った。相談所内部にうまく溶けこみ、内情を把握するのに、派手な経歴は却って邪魔になってしまう。

身上書に書かれた内容に加え、性的嗜好について克明に記したものを添付した書類を、性的身上書と呼ぶ。性癖は一生変わらないという説がある。当然、結婚を考えている相手には理解してもらいたいし、性癖を満足させてほしいと思う気持ちを持つのは当然だろう。結婚を決めたら、自分の持つっている性癖を墓まで持つていく人間も多いと思うが、最近ではオープンに明かし合う事で、より満足のいく生活を望む場合が多いかもしれない。

先に仕入れた情報の通り、佳子には尿にまつわる性癖があるらしい。本来、人の前で失禁するという事は、社会的に許される事ではなく、極力避けなければならない失態の一つとなるはずだ。その禁を敢えて破らせる事に、佳子は快楽を得るタイプの性癖を持っているのは、ほぼ間違いないだろう。

私は佳子の目に留まるため、彼女の性癖を理解し、相手を務めるためのトレーニングを始める事にした。

——続きは製品版でお楽しみください！

## 僕の性癖をなす一ピース

治おとしは、おしっこが近い事がコンプレックスだった。

読書に熱中してしまい、気付いた時にはトイレに間に合わない事がよくあった。いわゆる過集中という状態だ。

起きているときだけでなく、寝ている間にもおしっこが出てしまっている事があって、つらい朝を何度も迎えた。こちらは心因性と診断されている。

しかし、生殖器は勃起を隠そうともしなかった。傷ついた心とは裏腹の反応を見せていたのだ。

治は禁欲を旨としている。自慰行為は快感をもたらしてくれるのだが、出てくる液体の色が、自分ではわからないのだった。

白いのか、それとも黄色いのか。

射精感は何違いなくあるのだが、精液が出る事もあるし、おしっこが出てしまう事もある。こんな特殊な体質だから、おしっこで衣服を汚してしまう事を恐れて、自慰行為を封印する事に決めたのだった。

しかし、そうすると精囊は常に精液を作り続けるから、いつかは管を通じて外に出てくる事になる。治はいい歳になっても、夢精をする事が多い。自分で処理する事がないから、作りすぎた分が自然

と体外に排出されてしまう。

思春期の性の分化に不具合があったのかもしれない。

男性器には生殖のための精液を出す機能と、体内の老廃物を排出するために尿を出す機能が、本来備わっている。信じられないかもしれないが、先にも触れた通り、本当に外に排出されるまで、それが精液なのか、それとも尿なのか治には判断できない。

それに加えて、心因性と思われる頻尿が重なりいつも苦勞をしていた。バンド仲間にはよく飲みを誘われ、その度にピンチに遭い、勤務先の会社では、会議の度に尿意があふれ出る恐怖と戦う羽目に陥っていた。尿意を感じ始める閾値が低いのか、したいと思う時にはいつも限界で、ハラハラする日々を送っていた。

失敗の寸前まで行く事もしばしばあった。ちびってしまったてズボンの前に小さなシミを作ってしまうのだ。

それでもほんの小さなものだったし、人には我慢している事を気付られないよう、常日頃から意識しているつもりだった。でも、バンドメンバーの中には観察眼の鋭い子がいて、指摘しない親切心で見守ってくれたのだった。

『おしっこを我慢する事が苦手で、時にはちびってしまう事もある。この歳で夜尿もあり、苦勞が絶えない』

こういう風にバンドメンバーの一人にカミングアウトしたとき、あっけらかんとした表情で「ん？ 知ってるよ？ すぐく分かりますかったし」と言われてしまい、赤面した。その子は女の子で、自分の体質に限らず、様々な悩みを聞いてくれたし、かけがえのない

仲間だったから、軽い調子で流そうとしてくれたとき、涙が出そうなくらいに感謝したのを覚えている。

この子には隠し立てできないと思った。コンプレックスに思い、生きづらさを感じていた悩みが、精神的なストレスから解放してくれる行為へと変わってきている事。耐えてきた尿意から解放される心地良さ、その時に生まれる背徳的な気持ちだが、自己嫌悪と、禁を侵す時の昏い悦びの両方を産み出すという事。着衣のままで限界を迎え、失禁へと至る過程を味わうのが、癖になりつつあるという事。

彼女に笑い飛ばされたい。許されたい。あわよくば、自分の失態に至る一部始終を見てもらいたい。そして、それすらも君自身なのだからと受け容れてもらいたい。

想いは募っていく――

◆ ◆ ◆

治は重たい臉をゆっくりと開いていった。どうやら、ローテープルに突っ伏して、眠りこけていたようだ。手元には描いていた漫画がある。急いでよだれで紙が汚れていないか確かめた。こういう寝落ちの仕方をする、机が不自然に濡れていることが多かったからだ。漫画の提出日は、締め切り日という名前ですっかりと決められていたから、それを後に伸ばす事はできない。

どうやら、漫画の原稿は無事なようだった。治はほっと安堵の溜息を漏らした。

その時、下半身の違和感の存在に気付く。穿いていた短パンの、お尻の部分が妙に湿っている。

まさか。

治は手を背後に回し、短パンに触れてみた。すると、触れた指先が、じつとりとした濡れ感を捉えた。そのまま、床に敷かれたラグの状態も確かめる。トントんと叩いてみると、ジュクジュクとした感触。

やってしまったようだ。決して珍しい事ではなく、驚きは少なかったが、治はちよつとだけ自分に失望した。

おねしょ。

気持ちを切り替えて、おしっこが変な匂いを放つようになる前に、掃除して綺麗にしてしまわないと。

そう思つて腰を浮かせようとした時、もう一つの異変に気付いた。生殖器が大きく反り返っていたのだ。お漏らしをしてしまった時、治にとってはよくある生理現象だった。何か、身体をそのように反応させるきっかけがあったのかもしれない。例えば、少し煽情的な夢を見ていたとか。夢精がお漏らしの二択を身体が迫られ、お漏らしを選択したけれど、夢精もしそうだったとか。

特異的な体質だという自覚はあるけれど、おねしょという失態を犯しておきながら、おちんちんは大きく膨らんでいるというギャップが、何度経験しても治を戸惑わせた。

おねしょの処理は手慣れたものだった、濡れた部分の水分を十分に吸い取らせ、尿と中和させるための薬剤を使用し、匂いを防止す

る。シャワーを浴び、濡れた衣類は水に浸した後、洗濯機にかけて洗ってしまう。

時間を見ると、もう九時になっていた。昨夜は何時まで作業をしていたのだろう。最近は締め切りが近い事もあり、根を詰めて作業をしていたから、寝不足気味だ。

時間をあまり使いたくないし、朝はシリアルにミルクをかけたもので済まそうと思って、食卓の上に目をやると、一枚のはがきが置かれていた。

『わたしたち、結婚しました』

送り主は萩原寛二、おぎわらかんじ遙の連名となっていた。遙は幼稚園の頃からの腐れ縁（と言っても良いだろう）だし、完二は中学からの付き合いだったから、写真の顔ぶれに新鮮さは感じなかったけど、複雑な思いが頭を掠めていた。二人を祝福しようという気持ちに、その思いは上回っていた。

結婚したと、わざわざ報告を寄越してくるのには、理由があると思う。なんと表現すればいいのか。訣別、と言う表現がしっくりとくる気がする。

こういう話を聞いた事がある。親友の齊藤さいとうから聞いたものだ——勤めていた子が転職する事になり、送別会を開いた時の事。場が引けて、最後の挨拶を交わしている時、爆弾が一つ投下された。

「齊藤さんの事、好きでしたよ」

女の子はそれから、場を誤魔化すように「キャッ」と言っ、同僚の女の子達の輪の中に消えていったという。齊藤は既婚だったか

ら、浮ついた話は普通、ないものと考えたほうがいいだろう。送別会での彼女も、想いはあっても、それは届かないものだという諦めの気持ちがあつたに違いない。ただ、気持ちだけは伝えておきたい。そうする事で、すっきりとした気持ちで巣立つ事ができる。そういう女心があるのかもしれない。

高校の時、憧れの先輩が卒業していくのを見送る在校生。その中には、想いを遂げられずにいた女の子もいると思う。そういう場合に、気持ちだけは伝えておきたい、あわよくば、自分の事を思い出して欲しい。そういう心境になる女の子もきっといるだろう。乙女心というやつ、なんといじらしい事か。

治は、はがきの中にいる、遙の屈託のない笑顔と、両手で持ったウエディングブーケが眩しくて、直視できない思いに見舞われる。古い記憶とは言え、遙の天真爛漫な振る舞いや、誰も考えつかないような愛情の表現を求めてきた事を思い出してしまふと、頭ではなく、股間が熱くなってしまうのだった。

歪んでいる。それは自分が一番良く知っている事だ。

治は、古い記憶を更に掘り返していく——

◆ ◆ ◆

——うちでは猫を飼っている、だから猫砂がどんな用途に使われているかも知っている。人間と同じく、哺乳類としての欲求を満たす場所だ。猫を観察していると、まず猫砂に穴を掘る。そしてその場



所に腰を落とすとしばらく動かなくなる。生理的欲求を満たしているのだ。猫は自分が排泄する場所をしつかりと認識し、管理している――

幼稚園の頃の治は、外で遊ぶのが大好きだった。晴れた日はいつも砂場に陣取って、様々なものを創造していた。一度作り始めると、他の事が頭に入らなくなった。楽しくて、楽しすぎて没頭してしまう。時間も忘れて砂遊びをしていると、必ずセットで起こるのが、尿意という現象だった。一旦トイレに行つて、おしっこをしてこないと。おしっこしたい。

でも、それ以上に砂遊びは楽しい。トイレに行く時間すら、治にとっては勿体なく感じた。

治は、ショートパンツを穿いたまま、こっそりと尿意を解放していった。ゆつくり出せば、みんなにバレてしまう事はないだろうと思っていた。勢いが強すぎるといけない。砂が水を吸うスピードさえ分かっていれば、きつと大丈夫。手加減しておしっこを出すのはもどかしいと思う面もあったが、砂遊びをやめずに済むのであれば、どうといった事もない苦労だった。

治は、そういう方法で欲求を解放する事を覚えてからは、同じ風におしっこをして、砂遊びを続けた。誰にも気付かれていない、大丈夫。そう思っていた。

いつものように、砂場でおしっこをしていた時、それを強い視線で覗き込んでくる気配を感じた。それは、遙のものだった。見られていても、治は、砂遊びをやめてトイレに立つという事をしなかつ

た。いつものように砂で遊び、いつものようにおしっこをする、そういう日々が繰り返された。

「ねえ、治くん。裏庭まで来てくれないかな？」

声をかけてきた女の子は、治の砂場での行為を知っている、遙だった。

「え、いいけど、どうして？」

「それは後で話すから。ね、いいでしょ？」

「……うん、分かったよ」

後で行く約束をする事になるのかと治は思っていたら、遙は治の腕を取って、そのまま強引に裏庭まで連れていった。

――続きは製品版でお楽しみください！

## 悪い事するのが好き過ぎて

今捺月は、長年探し求めてきた、病的に重度な尿性愛者と通話する機会を持っていた。SNSで軽く話しているうちに、この人なら自分を理解してくれるだろうと思ったし、自分の思いもよらなかつた、尿性愛的な行為を重ねてきているかも知れないと感じさせるものがあつた。自分の語るエピソードでその時の興奮を思いだし、相手の語る話でその興奮を増幅させ、自慰をしながらの会話が続いていた。

「おしっこ趣味は小学生の時のプールが最初です。先生トイレって言えなくて我慢できずに水中で出しちゃったら、水が冷たいのにおしっこがすごくあつたかくて気持ちよくて」

性癖の始まりを話すのは楽しいものだと思ふ。生まれつき体得している場合もあれば、自分や他人の失敗から始まる場合もある。捺月は放尿の快感を、得てはいけな場所を得た事が始まりと言えそうだった。興奮で、手汗が酷いのが分かる。

「早熟だね。言われてみれば、僕も水泳の時間はプールのトイレ使った事ないよ」

捺月の話相手、秀則も、やはり同じ世界の人間らしい反応だった。プールという大きな水たまりがあるんだから、みんなおしっこし

たくなれば、そこでしてしまえばいいのに。秀則は、プールにトイレが設置してある理由が考えつかなかった。……確かに大きな方が催したらどうするのか、という問題はあつた。

「プールの時間トイレみたいになって、朝から我慢してプールで出すのが癖になってたんですよね」

「朝の尿意って結構きつから、そのまま学校までつてしんどくて気持ちよささう」

「水着で登校しててちびっちゃうこと多くて、最初のシャワー浴びたら反射で我慢できなくなつて、プールサイドで出ちゃったり」

尿意が高まつている時に尿意の話を聞くのは膀胱単体で考えるとあまりいい事ではないかも知れないが、脳みそ込みで考えると、マゾヒスティックな快感がある。英則は局部を直接揉んで尿意を誤魔化しながら、捺月の話を聞いていた。

「こんなにいけないおしっこエピソード聞いてたら、ますますおしっこしたくなつちゃつた」

「どうぞ、漏らしてください」

誘つて欲しそうな秀則の言葉を受けて、言つて欲しい言葉を選ぶ捺月。

「マジ？ お布団汚しちゃつていい？」

肯定の言葉しかあり得ないのに、口に出して言つて欲しい秀則。

「シミ残るくらいしちゃつていいです」

「今お布団に仰向けになって、足広げた」

「興奮してきました。すごく」

捺月の、おむつの中に突っ込んでいる手の動きが速くなる。

「少しずつ溢れてくる。息まないで自然に出てくるの気持ちいい……。あ、出てる」

おしっこを無責任に放出する快感を共有しているから、実況する事はどうしても必要だ。秀則はそれをよく分かっていた。

「いきそう……」

「オナニー気持ちいい？」

「はい、もうおまんこぐちよぐちよ、まんこぐちよぐちよです」

「まだでてる、えへへ……。あつたかい、おしり」

「またいきそう」

「イキションしても平気じゃん。捺月はおむつ穿いてるんでしょ」

「そういう風に促されたら、ほんとに出ちゃいます」

「うん、イキながらおしっこ出しちゃおう？ イキション、して」

「はい。イキション出ます」



マイノリティはマジョリティの中に紛れて生きていく必要がある、抱いた欲望は、誰にも気づかれないよう、迷惑をかけないよう、秘密裡に処理すべきものだ。本来であれば。

二人の場合は、露悪的な破滅願望と、背徳心を刺激する行為をしたいという気持ちに憑かれているため、重度な反社会的振る舞いをしてしまう。一般的な規範から外れた行動からのみ得られる栄養を

欲する余り、過激な事を繰り返していた。

少女趣味、所謂ロリコンは性犯罪を繰り返すという。幼い女の子にしか性的欲求を抱けず、行き場のない欲望を満たさずにはいられない。犯罪であると裁かれ、その罪を購ったとしても、欲望の炎は消えず、過ちをまたやらかす事になる。性癖とはそれほどまでに、人を狂わせるものなのだ。

秀則と捺月も、罪の意識はあっても、足を洗おうという気にはならないようだ。誰かに見とがめられたとしても、してはいけない行為を目撃され、注意されたという事実が身体を熱くさせてしまう。そして、何度も自らを慰めないと、正常な人間として取り繕うことができない、壊れた人種なのだった。

最初、SNSで出逢った二人は、今日初めて顔を合わせることになった。秀則はラブホテルをその場所を選んだ。捺月は人見知りする性格らしく、最初は大人しくしていたが、SNSではお互いの性癖やエピソードを包み隠さず話合ってきたおかげか、すぐに打ち解けたようだった。

「捺月、利尿剤はちゃんと注文できた？」

「はい！ 注文しちゃいました！ 早く届かないか楽しみです」

「海外からの取り寄せになるから、ちよつと時間はかかってしまうけどね」

「お薬って、インドだとか台湾だとか、色んな所から輸入されてるんですね。私、びっくりしました」

「利尿剤でも作用が強力なやつは輸入禁止だったりするけどね。医

師の処方箋がないと手に入らないやつとか」

「やばそうですね。試してみたかった」

「話変わるけど」

「はい、なんでしょう」

「一週間穿いてた下着持って来ちゃった。おしっこが出終わる前にちんぽ収納してたから、匂いやばいかも」

秀則はそう言うのと、鞆の中から袋に入ってた下着を取りだし、捺月に渡した。密閉できるよう、チャックが付いているにもかかわらず、漂い出す匂いは防ぎ切れていなかった。

「本当ですか？ 嬉しいですよ！ ばんつ、いただけるのであれば使います」

「今穿いてるのも、ちよつと我慢出来なかったから湿ってる」

「おしっこ我慢してきてくれたんですか？ いいですね、興奮しちゃいます」

「おしっこの匂い嗅ぎながら、おむつ穿いたまま捺月もおしっこして、ぐしょ濡れおむつでオナニーしてほしい」

「本当、ぐしょ濡れにしたいですね」

捺月は、早速もらった下着入りの袋を開け、中から一週間穿きっぱなしだった、秀則の下着を取り出していた。鼻を寄せて、すんすんっと匂いを確かめている。

「ばんつ穿いたまま出すのいいよね」

「お外で挑戦したいですね。穿いたままでじょわーって」

「アンモニア臭漂わせて電車とかもいいね」

「したいです。今日もらった下着、いっぱい匂い嗅ぎながら、お外でするのを想像してオナニーしますね。もう、必ずしちゃいます」

捺月は下着を鼻に押し当てて、幸せそうな顔つきをしていた。そのまま放置しておく、今すぐにでも自慰に耽り始めてしまいたいそうだった。

——続きは製品版でお楽しみください！